○議長（上田順康君）順番13、７番　清水信弘君。

〔７番（清水信弘君）登壇〕

○７番（清水信弘君）始めさせていただきます。酷暑の夏が駆け足の秋を連れてまいりました。異常に終始している今年の天候も、天高く天下の秋が豊穣でありますように。

これより一般質問であります。

１番目の質問を行います。一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな馬肥やせ。この手紙文は、戦の陣中から妻にあて送られたものとされています。それゆえ、そのあわただしさが感じられる中、簡潔でリズム感あふれ、かつ子どもへの慈愛に満ちた書簡文として、日本における古今の傑作とされていることは皆さんご存じのことと思います。

この一筆啓上から題材を求め、「日本一短い母への手紙」というコンクールを1993年（平成５年）から始めた福井県丸岡町、現在は坂井市丸岡町へこの８月９日訪れ、財団法人丸岡文化振興事業団大廻政成氏のお話を伺ってまいりました。驚きの連続で、話が１時間持つかと思っていたのが、午後１時30分から４時30分まで３時間にも及びました。

まず、彼の名刺の左端、縦には年度、月が英文表示され、上端には日にちが印刷され、オーガストと９に丸印が打たれておりました。あなたと2006年８月９日にお会いしましたと、いかにもさりげなく示されてありました。まずこの「日本一短い母への手紙」という企画を考えられたのはどなたですかという問いに、「私です」とこれもさりげなくありました。なぜ、この一筆啓上が丸岡なのか、ちょうだいした本の前書きによってみることにします。

1983年（平成５年）に、福井県丸岡町のまちおこしとして始まり、2005年で13回目を迎えた手紙のコンクール一筆啓上賞、これまでに届けられた手紙は85万通を超え、全国の人々に親しまれています。また、応募作品は毎年１冊の本にまとめられています。この一筆啓上賞は、そもそも日本最古の天守閣を持つ丸岡城・霞ケ城の石碑にある短い手紙からヒントを得て、日本で一番短い手紙文の再現、手紙文化の復権をめざして創設されました。その碑文は約400年前、徳川家康の勇猛な武将として名を馳せた本多作左衛門重次が、陣中から妻にあてて送った「一筆啓上　火の用心　お仙泣かすな　馬肥やせ」という手紙です。「文中の『お仙』とは嫡子の仙千代、後の丸岡城６代目城主となる本多成重のことです」と初め書きされています。お仙は男子であったとは知りませんでした。このようなことも知らずに大廻氏を尋ねたことを今さらながら恥じ入っておりますが、にもかかわらず、最後まで丁寧に応答してくれた氏に、この事業を立ち上げ現在も続けられていること、また氏の身分は旧丸岡町、現坂井市一職員であるということに敬意を覚えずにはいられないものがありました。その日本一短い母への手紙の作品集は、思わず涙するものなど、数行に秘めたそのドラマたるや感動がいっぱいにあります。

現在は、新一筆啓上賞「愛」の往復書簡集として新しいシリーズを立ち上げています。そのシリーズの趣旨は、今までは一方通行の手紙だったが、その返事も求めてみよう、それで愛が完結するのではという、これも大廻氏の提案で、現在第１回の作品集が発刊されています。一つ、とても気に入った作品がありました。紹介いたします。「かつての少女へ

初恋っていいものですね。30年たっても今の僕を支えてくれます」「かつての少女から初めて知りました。同窓会には出席しないでください」。

丸岡町は現在、まちおこしとして始めた文化的な事業でこのように出版事業での利益や、またご存じの方もあるやもしれませんが、①時を超えて未来へ届けたい手紙はありませんか。あなたのまちの郵便局がお届けします。思い出カプセル便。②また、その日本一短い母への手紙が映画化されたときの関係から、東映太秦映画村に丸岡町の出張所、そこでの産品の販売、市内・旧町内には一筆啓上の名を冠した清酒、油揚げ、サバずし等々、まち自体の胸が大きな息づかいで上下しているように感じられるものがありました。聞けば、この旧丸岡町も機織りのまちであったとか。以前、竹村健一氏がどこかの番組で、フランス印象派の画家モネの仕事場を美術館として立ち上げた都市のことを挙げ、文化は金になると言ったことを覚えていますが、なるほどこういうことかと感じ入って戻ってまいりました。

橋本を日本一有名な市にしたい、私ならずともこう思う市民、議員はあまたいることでありましょう。有名になれば、何をしても注目されます。少し乱暴な言い方をしますが、それを武器に全国に戦いを挑むことも可能です。企業誘致に木下市長はご熱心ですが、そのことでも相手方に、ああ、あの橋本市と興味を持ってもらえることは必定でしょう。

我が国には年賀状、暑中見舞いという国民こぞっての文化習慣があります。23年前、私は東京の会社を辞して、現在の仕事を始めました。各社からいただく暑中見舞いは暑中お見舞い申し上げますのほかに、「８月13日、14日、15日は勝手ながら休業させていただきます。時節柄お体ご自愛ください」ということを記している以外の表記のあったものの記憶はありません。これでは、せっかくの便りがあまりにもそっけないのではと思い、私は「暑中お見舞い申し上げます」その後ろに、「８月13日、14日、15日は休業いたしません」と書きつづりました。三、四人の方から「おもしろい」という応答をいただき、それ以来何か感想をもらえる文を書こうといつも心がけてまいりました。その年の年賀状には、「年内無休、元旦より営業」とやりました。同様の反響はありました。

年賀状は毎年流通枚数が38億から40億枚、40億を１億2,000万人の国民人口で除すと、１人33枚という数の往来があるということになります。私がここ橋本でやってみればと思うのは、この年賀状を本市が差出人の恋人、親友、友人、家族、子ども、顧客等になって受けてみてはどうだろうかということであります。

私が各人各社からいただく年賀状は、写真あり絵画あり、かわいい干支のマスコットあり、実にきれいで凝ったもの、何カ月も前から考えたであろう俳句、川柳、短歌集、もちろん散文もあります。こういったたくさんの人に出す個人自信の年賀状を、１枚だけ我がまちに送付してもらう。郵便局に届けておけば、この橋本市役所の住所を調べずとも、郵便番号だけでその担当部署まで届きます。我が国の年賀状文化をさらに向上させ、その見本を全国に提案する。なるほど、こういう年賀状もあったのだという見本を全国に発信できればどうであろうかと考えています。

それに対して、差出人に賞を出せば、１冊の本の中に自分の作品が載れば、これ以上の返事はないのではとも思います。同様に暑中見舞いもやればいいと思いますが、これは近隣の市町に譲り、提携してやればどうかとも思います。

我がまちにもいわゆる文化にたけたたくさんの方がおられます。審査員として持てる能力を全国に発揮できる場所を市で提供されてはいかがでしょう。満杯のご協力をいただけることでありましょう。文化、文化事業への木下市長の考えをお伺いします。

次に移ります。ごみ袋について。

この問題については、予算委員会でも質問いたしましたが、その後、紀の川カッパ祭でそのときの当局の回答ととそごする不思議な現象を発見いたしました。ゆえに、いま一度の一般質問に及びたいと思います。以下の４点について答弁いただきたく思います。

①旧高野口町、旧橋本市のごみ袋の在庫は現在どの程度あるのか。各種の枚数及び販売されたときどれぐらいになるのか、金額でご答弁ください。

②なぜその在庫がなくなってから新しいものに変えようとしなかったのでしょうか。新市になって新しいごみ袋で出発しようとの考えであるのかもしれませんが､財政逼迫の折、新市即新ごみ袋という考えはいかにも短絡としか思えません。

③古いごみ袋は各種イベントに使うから無駄にはならないという回答もあったやに記憶しています。しかし、その各々のイベントの主催がわかっており、そのごみもクリーンセンターへ直接持ち込むのであれば、特に指定のごみ袋でなくてもよいのではないでしょうか。廃棄処分のビニール袋、段ボール等で十分なのではないでしょうか。

④その考えを百歩譲り、旧ごみ袋のイベント使用で在庫をはかすとして､草刈り全時間、祭り当日、翌日のごみ掃除全時間、木下市長に参加いただいた今年のカッパ祭、最後のごみ掃除で使用されていたのは新しい橋本市のごみ袋がほとんどで、旧高野口町のものは申しわけ程度で使われていたに過ぎませんでした。なぜでしょう。

以上、演壇より終わります。

○議長（上田順康君） ７番　清水信弘君の一般質問に対する答弁を求めます。

市長。

〔市長（木下善之君）登壇〕

○市長（木下善之君） 清水議員の熱弁のご質問にお答えをいたします。

文化的事業でまちおこしを、橋本市を日本一有名な市にしてはどうかとのおただしでございますが、議員が例を引かれた丸岡町は、平成18年３月に坂井町、三国町、丸岡町、春江町の４町が合併し坂井市となり、合併後の坂井市でも今年の４月に新一筆啓上賞「愛」の顕彰式が行われました。一筆啓上賞はもともと丸岡町ゆかりの手紙文からの発想がもとで始まったものであります。この一筆啓上のイベントは全国の自治体主催の公募イベントの先駆であり、全国で同じような公募が行われるきっかけとなりました。平成17年11月に近隣３カ町と合併し、兵庫県多可郡多可町となった旧加美町で特産の杉原紙を使ったはがきにちぎり絵や切り絵などを描いた年賀状のコンクールが行われていたようでございます。これなどは、特産品のＰＲを兼ねたものと思われ､地域文化の発信の一例かと思われます。

確かに、市の名を上げ、多くの人々に、ああ、あの橋本市と興味を持っていただくことは、市の誇りでもあります。そういう意味でいえば、我が橋本市は日本一のへら竿の産地であり、日本最古の国宝に指定されている隅田八幡宮の人物画像鏡がございます。高野口地区はパイル織物で全国に有名、名が知られておりまして、また前畑秀子氏や古川勝氏の２人の金メダリストや、世界的数学者の岡潔氏も橋本市の名誉市民でもあります。このようなすばらしい郷土の誇りを全国の皆さんに知っていただけるよう努力してまいりたいと

考えております。

我が橋本市には多くの文化団体があり、実に117の文化団体を社会教育団体と認定し、社会教育施設並びに社会体育施設等の使用料の減額及び免除を行うとともに、必要に応じて運営及び指導者養成のための研修参加などの機会提供、補助金等の交付などのバックアップをしております。地域に根差し、市民に支えられ、住民の間に広いすそ野があってこそすばらしい文化が生まれるものと考えております。子ども狂言教室、小中学生対象の将棋大会など伝統文化の継承、姉妹都市との中高校生の交換で異文化理解を促進するなど、若い世代に文化を根づかせ、育てていくことも非常に大切であると考えております。

議員ご提案の年賀状コンクールを含めて、橋本市を発信するということについては、大変多くの自治体主催公募イベントが乱立する中、橋本市の特色を踏まえ、どのような内容、手法が適当であるのかなど、今後研究してまいりたいと考えておりますので、ご理解のほどをよろしくお願いいたします。

なお、残余の件につきましては担当参与よりお答えをいたします。

○議長（上田順康君）市民部長。

〔市民部長（宮岡清文君）登壇〕

○市民部長（宮岡清文君）清水議員のご質問にお答えいたします。

旧橋本市、旧高野口町のごみ袋在庫数についてでございますが、旧橋本市の在庫につきましては、可燃ごみ大袋が4,800冊、可燃ごみ小袋が800冊、これを合併前の販売額にしますと、総合計で210万4,000円になります。旧高野口町の在庫は可燃ごみ大袋が１万500冊、小袋が5,080冊、廃プラスチック大袋が5,500冊、小袋が8,400冊、ペットボトル大袋が2,000冊、小袋が5,100冊、これを合併前の販売額にしますと、総合計で545万8,000円になります。

次に、なぜその在庫がなくなってから新しいものに変えようとしなかったのかのご質問についてでございますが、ごみ袋の仕様が変わったことにより、条例規定上販売ができなくなったためであります。しかしながら、厳しい財政事情でもありますので、旧ごみ袋の販売を検討してまいります。

続きまして、各種イベントのごみについては、指定のごみ袋でなくてもいいのではないかのご質問についてでございますが、クリーンセンターに持ち込んでいただく際、特にごみ袋の指定はいたしませんが、ごみは分別して処分及び保管場所へ廃棄及び置いていただくことになります。なお、各種イベントのごみは正しいごみの分別啓発の場でもあるため、できれば市指定のごみ袋を使用して、啓発の一環としていただければと考えます。

続きまして、今年のカッパ祭で使用されたごみ袋についてのご質問についてでございますが、旧ごみ袋は準備しておりましたが、祭り翌日の清掃の際不足したため、急遽準備しなければならず、新ごみ袋で対応したと実行委員会より聞いておりますので、ご理解をお願い申し上げます。

○議長（上田順康君）７番　清水君、再質問ありますか。

○７番（清水信弘君）再質問ありません。終わります。

○議長（上田順康君）これをもって、７番　清水信弘君の一般質問は終わりました。